バグを右手に、いざ進め

Perolin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バグを右手に、いざ進め

【Ｎコード】
Ｎ０５２６ＢＡ

【作者名】
Ｐｅｒｏｌｉｎ

【あらすじ】
高校２年生の俊馬と妹の夏希は、Ｇｅｎｅｓｉｓ　Ｏｎｌｉｎｅβテストに参加する事になった。俊馬達はファンタジー世界を純粋に楽しむが、アクシデントに巻き込まれて…

プロローグ

ゴオッゴゴゴオッ
巨大な火球が一瞬前まで俺がいたところで爆ぜた。
手に持つ剣を盾にして爆風を避けると、一気に前へ走る。
シュー　シュー
目の前にそびえ立つ竜の口には、もう次の火球が出来かけている。
俺は足に力を込め顔の高さまで飛び上がると、両手に握った剣を竜の脳天に振り下ろした――――――

「……て……きて…」
ん？何だろう？聞き馴染んだ誰かの声が聞こえる…
「……っきろっ……起きろやボケェ！！」
バキッ
寝起きの顔面に枕が振り下ろされる。あれ？柔らかいはずなのに痛えや。
「って枕カバーにトロフィー入れてんじゃねえ！」
俺はトロフィー入り枕カバーを、再び振り下ろそうとしている妹をしかりつけた。
「だって起きないじゃん、兄ちゃん。今日が何の日か覚えてないの？」
妹の夏希（なつき）が腰に手を当てて聞いてくる。ノースリーブの白いサマードレスから覗く肩が、兄の俺から見ても眩しい。
「おい、まだ六時じゃねえか
なんでこんな時間からオシャレしてんだ？」
「８時までに家を出ないと間に合わないからよ。私まだ準備何もし

てないから、兄ちゃんに手伝って貰わないと！
ほら、バスが出るまで後２時間半！」
「はぁ？バス？何言ってるんだ？」
夏希が呆れたように首を振る。
「今日から、ＧＯのβテスト開始だって、私３週間前から言ってたよね？」
俺はハッとして机の上のＰＣを見る。スリープモード中でも、カレンダーと時計だけ表示するように設定しているホログラムキーボードのノートＰＣは、今日が２１０１年８月１日である事を示していた。

＊＊＊＊＊

３週間前の事だ。
「兄ちゃん、良い知らせと、良い知らせがあるんだけど、どっち聞きたい？」
「良い知らせから頼む」
「オッケー、じゃあ良い知らせから。」
この話は、いつもの様に突っ込み役のいない兄妹の会話から始まった。

「実はね、父さんから、ハワイのクルーズに連れてってくれるってメールが来てたんだ。
出発は、８月１日。」
「へー、楽しみだな。で、良い知らせの方は？」
夏希がニヤリと笑う。こういう時、大抵は父さんが悲しむ結果になると、俺は経験から知っている。

「実は、Ｇｅｎｅｓｉｓ－Ｏｎｌｉｎｅのオープンβテストの応募が当たったんだ！
ホテル・アンジェラスで３週間泊まり込み。出発は８月１日だけど、兄ちゃん来られるよね？」
夏希は真っ黒な封筒を二枚――２２世紀になった今でも、重要書類等のは紙媒体だ――つきだして、今度はニッコリと笑う。差出人は「株式会社　Ｌａｓｔ　Ｆｒｕｉｔ」、宛先は俺たち兄妹の名前――「外澤俊馬（とのさわしゅんま）」と「外澤夏希」――になっていた。

Ｇｅｎｅｓｉｓ－Ｏｎｌｉｎｅとは、ゲームソフト制作・開発会社の「株式会社　Ｌａｓｔ　Ｆｒｕｉｔ」が開発したＶＲＭＭＯＲＰＧ（Ｖｉｒｔｕａｌ　Ｒｅａｌｉｔｙ　Ｍａｓｓｉｖｅｌｙ　Ｍｕｌｔｉｐｌａｙｅｒ　Ｏｎｌｉｎｅ　Ｒｏｌｅ－Ｐｌａｙｉｎｇ　Ｇａｍｅ）である。「Ｌａｓｔ　Ｆｒｕｉｔ」社は、これまでにもＭＭＯＲＰＧで収益を重ねてきた実績のある会社なため、ＶＲに手を出したのは今回が初めてであるにも関わらず、期待度はものすごく高かった（というのは、同級生のオンゲーオタクの友達の話である）。
また、オープンβテストであるに関わらず「応募」、「抽選」というクローズドな方法をとったのは、まだＶＲ機器の普及率が３０パーセントに満たないからしい。事実、社会全体で見ればかなり裕福な方である俺の家にもＶＲ機器は置いてない（俺達兄妹に購入する財力が無いだけで、家庭全体の財力としては、購入可能だ）。勿論、ＶＲ機器を所持している者なら、わざわざ応募しなくてもオープンテストには参加できる。
まあ、それはともかくとして

俺は封筒を受け取ると中身を出し、素っ気ない文字だけのレター

と、飾り文字で「Ｇｅｎｅｓｉｓ－Ｏｎｌｉｎｅ」と書かれたチケットを見比べて、重々しい顔で妹の方へ向き直った。
夏希は緊張の面持ちで俺の言葉を待つ。
「勿論さ」
大きくうなずくと、俺たちはニヤリと笑みを交わし合った。そう、父さんは犠牲になったのだ…

＊＊＊＊＊

そして現在。
俺は妹のコーディネート――真っ赤なポロシャツにデニムパンツ――に着替えると、妹の渡してくれた弁当を鞄に詰め込む。階段を駆け下りると、お手伝いの沢村さんに挨拶をしてリビングの扉を開けた。そこには父さんが、盛大に苦笑いしながら座っていた。
「帰ってくるならメールくらいよこせよ」
「三週間くらい前に夏に聞いただろ？今日からハワイだって。俊も夏もゲームしに行っちゃうってんだから、俺は仕方なくぼっちクルーズと決め込む事になったんだよ。」
そういえばそうだった。俺は三週間前、さらっと流した夏希の言葉を思い出した。
「今年も行けなくてごめんねー
来年はきっと、一緒にいられるよ」
夏希が悪戯っぽい笑顔で慰める。夏希はまだ高校１年だが、表情の使い分けはベテラン女優に勝るとも劣らないくらいに、上手い。
「ああ、来年は一緒にいたいな」
父さんは、簡単に夏希の笑顔に丸め込まれてしまった。
「さあ、そろそろ時間だろ？俺の出発は夜の便だから、お前らをおくってくことくらいはさせてくれよ。

１年で3ヶ月しか帰って来れない俺の、ちょっとした罪滅ぼしなんだからな。というか、ぼっちって寂しいんだからな。」
「そんなこと気にしなくても大丈夫よ。父さんがいない間、私たちはあんな事やこんな事を…」
「おい俊馬、今度二人っきりで今後の兄妹関係について話そう。」
「いやいや、俺は何も…！」
親子三人の会話を聞いて、沢村さんはクスクスと笑っていた。

＊＊＊＊＊

「ず、ずいぶんとでかいじゃねえか」
「そうだね。すごい大きい」
「これ２００人くらい乗れそうなんじゃないか…？」
俺たちが前にしたバスは、言葉通り簡単に２００人くらい乗れそうな大きさを誇っていた。
２２世紀になっても、車が空を飛ぶ、ということはなく（技術的には可能だが、空路整備やら自動車犯罪防止策やらで、馬鹿にならない人件費がかかるので経済効果は望めないという行政の判断らしい）、相変わらず地面を走行している。しかし、空を諦めたからと言って他の部分の技術に大きな進歩が見られたかというと、そうでもない。自動車自動運転システムは一般化されたし、長年開発されていた「ｅｙｅｓｉｇｈｔ」等の事故防止技術の進展も、自動車事故年間件数０件という長年の人類の目標を達成するのに一役買っているとはいえ、どちらも１００年前から存在はしていた技術だ（１００年前の人が見たら、自動車事故年間件数０件なんて夢のような話だと思うかもしれないが）。
とにかく、とんでもなく巨大なバスを目の前に、俺達は立ちすく

んで「大きい」という意味の言葉しか吐かないアンドロイドのようになっていた。
近くの乗組員が声をかけるまで、そのやりとりは続いていた。

＊＊＊＊＊

いつまでも手を振り続ける父さんが見えなくなるまで窓際に立っていた俺達は、バス内にある個室に荷物を置いて落ち着いていた。驚くべき事に、ベッドからクローゼット、洗面台まで完備されている。まるで小さなホテルじゃないか。恐るべき待遇に、俺は感心した。――ベッドがダブルなのには感心しないが。
「いいよ、兄ちゃんベッドで寝ててもどうせ1時間で着くし、私はクローズドの攻略サイト見てるから。」
夏希が珍しく優しいぞ！前日、3時まで課題をやっていた俺の体を思ってくれるなんて…いや、そういえば、昨日3時まで課題をやらされたのは、夏希の分まで手伝わされていたからだった…
俺は妹の言葉に素直に従い、ダブルベッドに大の字に寝て夢の世界へダイブした。

こうして、俺達の長い長い夏休みは始まったのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0526ba/

バグを右手に、いざ進め

2012年1月1日01時47分発行